

落語

ドイツの哲学者ニーチェが「善悪の彼岸」で書いたことでもあります。最も成熟した人格には笑う才能が含まれるようです。むろん、単純に全てのことに對して笑うのではありませんが、真面目なだけでは足りないのです。ニーチェによると、神の域に達したかのような黄金の笑「Golden Laughter」ができる人間は、上品な人格を持っているそうです。

ニーチェの指摘に基づいて…というか、本当は単に自分の興味に従って、先月の日本出張の際に落語を初めて観に行きました。

11月11日（日曜日）、大阪天満宮の入り口のところにある落語寄席・繁昌亭を私は訪れました。その日の昼席興行は満席に近く、前の方にかろうじて見つけた席に座ることができました。

午後1時の開演まで何をすることもなく暇なままに待っていると、天井からぶら下がった提灯が揺れています。提灯の動きは、満席の客の呼吸に同期しているようでした。もちろんこれは、昼食をまだとっていなかった私の空腹が起こした空想にすぎません。目を提灯からステージの緞帳に移すと、その鮮やかな金色に視界が吸い込まれるような気分になりました。写真からは分かりにくいですが、金色の生地が艶やかで、緞帳を見るだけで、私の心の中では既にパフォーマンスが始まっていたようです。

しかし、本当の落語が始まるやいなや、緞帳の落ち着いたパフォーマンスは吹き飛ばされてしまいました。落語のパフォーマンスは、桁違いの速度で行われました。

次から次へと笑いの渦が落語家から観客に投げかけられました。私は、面白くてお腹が痛くなるほど爆笑を続けました。冗談を理解



していないけれども隣りの人が笑っているから笑っておく、というようなのでは決してありません。本当におもしろい！アメリカ人の私は100%を理解することは不可能だと思うのですが、楽観的に90%近くは理解したと思いたいです。

一人目の落語家は、動物園でトラの皮を被ってトラの檻に入り、トラの真似をしなければならぬ男の話をしました。トラの真似をしている彼を本当のトラと来園者が勘違いしているうちに彼は空腹になり、来園者が食べているものの名称をトラが吼えているような声で言うと、来園者が驚いて彼にその食べ物を投げてくれるのです。最後に、同じ檻にライオンが入ってきて、トラの真似をしている男が「困った」と思ったら、ライオンの被り物を脱いで同僚が現われ事無きを得たのでした。

二人目は、電車の忘れものの保管所を担当している友達が語る話をしました。電車に忘れた傘を取りにくるお客さんについて彼が語るのですが、それもまた面白い話でした。

しかし、思ったのですが、落語の最も強力な特徴は話の内容そのものじゃなくて、落語家が身振り手振りを交えてやる説明のし方や喋り方にあるのです。どうでもよい話であっても、それを落語家が喋ると大爆笑な話に変わり、落語は大成功となるのです。

いうまでもなく、文化が異なると、ユーモアは違う形をとります。しかしながら、今回の落語鑑賞を経て私が個人的に思うのは、言語を深く理解していたら、文化が違っててもユーモアを相当に理解することができるということです。

アメリカのユーモアは、皮肉 (sarcasm) が一番強い回転軸です。とくに、事実の反対とか、本当に思っていることの反対を言うとか、ウケます。ただ、それだけではダメで、ウケるためには声の抑揚を変えないといけないのです。その抑揚の変化によって皮肉であることを理解してもらえらるからです。

アメリカには落語はありませんけれど、一人でおこなうお笑いが多いです。それは、生のステージの場合も、テレビのお笑い番組の場合もあるのですが、とにかく一人がずっと喋っています。たとえば、Craig Ferguson という芸人が毎晩夜遅くテレビ番組にでています。彼は、喋っている間に、わざと違和感を感じているような雰囲気を一時的に作ったり、自分が言い過ぎたところで困ったように見せたり、普通の会話に出てこない猥褻なフレーズを挿入したりすることによって、自分自身を馬鹿にする雰囲気を作り出すことでかなり成功しています。

しかし、一人で喋ることは落語に似ていますが、喋り方が違うかもしれません。特に、一人で複数の人を交互に演じながら話を進めるやり方は落語独特のものがあると思いま



す。

私は日本をもっともっと理解したいので、今回の落語をきっかけとして色々な日本の“笑い”を試してみたいと思っています。文化をより深く知るためには、その国のユーモアを理解しなければなりません。また、ユーモアを理解するためには、言語をより深く理解しなければなりません。言語を理解するためには、言語が持つ音楽性を味わう必要があります。そして、音楽を理解するには、人の気持ちを解読する才能が要ります。そんな形而上学的な思いをめぐらせながら、私は日本の景色を眺めるのです。

筆者紹介

ネルソン・グラム

U.S. Attorney (Virginia Bar), Global IP Counselors, LLP 所属。

1981年米国バージニア州生まれ。ジョージ・ワシントン大学 (DC) で国際関係論を学びながら、ウルグアイ大使館でインターン。卒業後、2003年渡日、香川県三野町 (現在三豊市) の国際交流協会にて一年勤務。うどんが大好物となる。帰国後、ジョージ・メーソン大学ロースクール卒。2008年8月からGlobal IP Counselors, LLPに弁護士として勤務。趣味は読書、運動。好きな言葉は「鳴かぬ鶯が身を焦がす」。